マレーシアの高等教育機関における教科書「まるごと日本のことばと文化」
― 実践を通しての考察―
MARUGOTO TEXTBOOK IN MALAYSIA HIGHER EDUCATION INSTITUTIONS
-A study from class observation-

Zoraida Mustafa[1], Kumiko Date[2]
Universiti Sains Islam Malaysia (USIM)

１．背景

本稿は、マレーシアイスラム科学大学の日本語授業で使用されている教科書『まるごと日本のことばと文化』の実践の報告である。

マレーシア国内の大学における日本語教育は、大きく二つの目的で行われている。それは日本留学を目的とする予備教育と外国語選択科目の外国語教育である。国立大学で行われている日本語教育は、外国語選択科目という扱いが多い。また、様々な日本語教科書の中で、多くの大学は『みんなの日本語』を使用している。

2013 年にマレーシア教育省（当時高等教育省）が、国内における英語教育標準化を目標に English Language Standards and Quality Council (ELSQC)を立ち上げた(Mohamad Uri、2018)。この ELSQC によって、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)がマレーシア国内でも適用されるようになり、同時に他の外国語教育においても CEFR を積極的に用いることが推進された。そこで、マレーシアイスラム科学大学(USIM)では、新しく開講する日本語コースに CEFR に準じている JF スタンダードの教科書『まるごと日本のことばと文化』（MARUGOTO）を用いることとし、新たなコースデザイン及びシラバスを組み立てた。

２．MARUGOTO と USIM のカリキュラム

USIM では英語の他アラビア語が必須科目となっており、その中で中国語と日本語とフランス語が選択科目として位置づけされている。しかし、Faculty of Major Language Studies（主言語学部）では、中国語と日本語は必須選択科目となっているため、主言語学部の学生は学位取得のために、中国語と日本語は必須単位となる。

学部では、過去に日本語コースが開講されていたが、2016 年度より新しく MARUGOTO シラバスによる日本語コースが開講され、今日に至っている。2016 年に開講された時は『A1 入門 MARUGOTO かつどう』のみが使用され、週に２時間の総数 28 時間のコースであった。2016 年の実践を通して、試験的に用いられた MARUGOTO の適切性が確認され、2017 年度より『A1 入門 MARUGOTO かつどう・りかい』両方を使用することになった。

３．MARUGOTO シラバス

現在 USIM の日本語コースは次の表のようになっている。

コース	教科書	時間数（時間）	単位	評価
日本語Ⅰ	A1 MARUGOTO 入門 かつどう編・りかい編 Lesson 1～Lesson 10	教室内学習（48） 総学習時間（120）	3	• 仮名課題 • クイズ • スキット • 期末試験
日本語Ⅱ	A1 MARUGOTO 入門	教室内学習（48）	3	• クイズ

	かつどう編・りかい編 Lesson 11〜Lesson 18	総学習時間(120)		• 町紹介ポスタープロジェクト • 期末試験
日本語 III	A2 MARUGOTO 初級 かつどう編・りかい編 Lesson 1〜Lesson 10	教室内学習(48) 総学習時間(120)	3	• クイズ • 会話テスト • ファイナルプロジェクト • 期末試験

表１：USIM 日本語コース構成

会話の他、各コースの学習目標に合わせて「書く」と「読む」技能も育成するために、文字教育（ひらがな・カタカナ・漢字）もシラバス内に取り入れた。この他、e-ラーニング促進のために MARUGOTO をサポートするウェブサイト(marugoto.org, marugotoweb.jp, minato-jf.jp)も利用している。

４．実践とその結果

USIM の日本語受講生は地方宗教学校出身者が多く、日本語を初めて習った学生がほとんどである。中にはアニメや日本のポップカルチャーに興味があり、独学で日本語を勉強している学生もいるが、数は極めて少ない。また、MARUGOTO「かつどう」と「りかい」の教科書を併用しているため、授業に自主的・積極的に臨むことが大変重要である。授業の流れを下記に記す。

『A1 MARUGOTO かつどう編』授業手順

1. ブレーンストーミングのためにトピックについて話す
2. 教科書で必要な語彙紹介（この場合マレーシア事情の説明に必要が語彙も紹介）
3. CAN—DO 内容確認
4. 教科書の内容の聞き取りと意味確認（この時点では文法の説明はしない）
5. グループでタスクを行い、話す練習（教科書内の CAN—DO 確認）
6. CAN-DO statement チェック

『A1 MARUGOTO りかい編』授業手順

1. 宿題として課題を与える
2. クラス内で答え合わせと文法内容確認
3. 作文・読解の練習

トピック２の授業の流れの例を図１に示す。

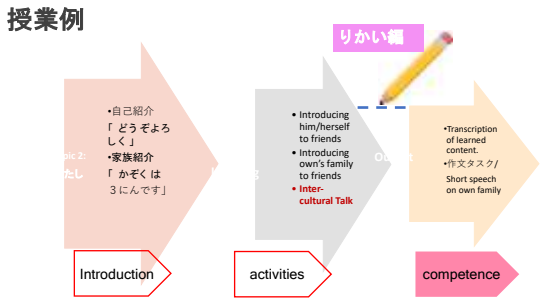

図１：トピック２の流れ

これらの過程を繰り返し行い、まとまった表現と語彙が増えた段階で、グループタスクをクラス内で実践し、そのプロジェクトの成果をシェアする。2018/2019 の A１入門終了時には、「わたしの町」というテーマでグループタスクベースプロジェクトを与え、クラス内で発表させた。そこで、2 学年期間[i]で終了したばかりの受講生 148 人に対して授業に関するアンケート調査を実施し、105 人から得た回答の結果をまとめ考察した。

まず、授業で習った日本語を使って会話が出来るかという質問に対して、5 割以上の学生は勉強した簡単な表現を使って日本語の会話が出来ると答えた。同様に相手の言っていることが理解できるかという質問に対して、大体わかるという回答が５割以上占めた。また、教室活動参加に関しては、７割以上の学生が積極的に参加したと回答した。中でもグループ活動と町の発表プロジェクトが最も印象に残ったと答えた学生が多かった。付随されているウェブサイトに関しては、99％の学生がウェブサイトを活用しており、利用にあたっては、宿題とタスクを完成させるためという返答が最も多かった中で、自分の時間があるときに自主的に利用するという回答も少なくなかった。ただし、利用しなかったと答えた学生の中にはインターネットのアクセス問題と時間が足りなかったという理由を挙げている者もいた。この結果より、この教科書の充実したウェブサイトの活用が、学生の自主的な日本語学習に良い影響を与えていることが分かった。

一方で、場面会話から始まる MARUGOTO 教科書の特徴の一つに、学生が会話の場面を推測し表現を耳で捉え自ら発話していくという習得法が挙げられるが、アンケートの結果では文法の正確さを気にしながら話す学生が７割以上もいることが分かった。このことは、多少間違ってもコミュニケーションが取れるということよりも、文法に対する意識が高く相手に正しい文法で話の内容を伝達したいと思っている学生が多いことを示している。

最後に、日本語を学習して最も面白かった・嬉しかったことは何かという質問に対し、次のような回答が多くみられた。

1）日本語だけでなく日本文化に触れることができた（文化紹介プログラム参加）。
2）友達と簡単な日本語で話せるようになった。
3）日本の映画・アニメを見て日本語がわかるようになった。

以上のことから、継続的に授業を受けた学生の様子から次のようなことが推測された。

1. 短期間で日本語が話せるという達成感が得られる。
2. 会話タスクでは、クラス内でアクティヴラーニングが促進できる。
3. 各課の内容をまとめて簡単なタスクベースプロジェクトができる。
4. 教員の指示がなくても、学生が自主的に勉強できる
5. 限定されてはいるが、コミュニティでの日本語環境が作れる。

5. 問題点と今後の課題

マレーシア国内では MARUGOTO が使われている機関があまりないため、参考にできるケースが少ない上、使う機関があっても大学によって運用法が異なるため、USIM での試験的な試みが必ずしも参考になるとは言えないであろう。実際、次のような問題点も挙げられる。

1）不十分なインフラ・整備―MARUGOTO をサポートするウェブサイトがあっても、構内のインフラ問題でアクセスできない時もあり、諦めて宿題をしなかったり、タスクを未完成だったりするケースがある。

2) 「かつどう編」は会話から導入するため、誤用が多発する。なぜならば、学生は耳で聞き取れた音から会話を作る傾向が強いからである。つまり、文法の定着に時間がかかる傾向がある。
3) 上記 2)とも関連するが、「活動→理解」という授業の進め方は、文法積み上げ式の授業をしてきた教師側に、教え方に対する戸惑いを感じさせる。

この 3)に関しては、これから MARUGOTO を教科書として初めて用いていこうと考えている教師なら、同じような不安を抱くに違いない。だが考えてみれば、新しい文型を導入する際、教師が何を言おうとしているのかを学生に推測させ理解させる導入法は、文法積み上げ式の教科書でも使われており、この教科書を使うことでその導入方法が大きく変わるものではないと思われる。MARUGOTO ではそれが、明確に 2 冊の教科書に分かれていると考えればよいのではないだろうか。最も大切なことは、教師がこの教科書を活用しながら①学生の自主的な学習を促すための刺激や情報を適時取り入れているか②学生に考え推測させる時間を十分に与えているか③学生が積極的に発話する機会を設けるために教師の発話量を必要最小限に抑えることができるか（講義のような授業になっていないか）④学生との言葉のキャッチボールが上手にかつ効果的にできているか、といった教える側の can-do を常に頭の中に描いておくことであろう。その際、学生の教育的背景や学習動機、言語習得に関する能力等も念頭に置いておかねばならない。もちろん、こうした教師の授業に臨む姿勢は MARUGOTO に限ったことではなく、どんな教科書を使っても言えることではあるが、教師の can-do の意識化は、学生の can-do チェックと同様にこの教科書を使う上でより重要な位置づけになっていると思われる。

USIM の日本語科目は、プログラムの選択科目であるため、学生にとってアラビア語と英語に比べて重要性が劣るのも致し方ない。また、中国語に比べ、実用性を低く感じている学生も多いため、日本語コースは、言葉の運用能力のみならず文化的な要素も積極的に授業に取り入れるように努めている。A1 入門に関しては、凡その感触は得られたが、A2 初級は 2019 年度より初めて使用する教科書であり、なおかつ学部全体的なプログラム構成のせいで、残念ながら 1 冊を終わらせることができない。従って、コース終了後も学生に日本語学習を継続するための対応策も考えなければならないであろう。

以上のように、当コースが抱える問題は多岐にわたり手探り状態ではあるが、新しい教科書「まるごと日本のことばと文化」が、USIM の日本語教師に求める“can-do”とは何かを考えつつ、これからも真摯に取り組んでいきたいと思う。

<u>参考文献</u>

Nurul Farehah Muhamad Uri & Mohd Sallehhudin Abdul Aziz (2018).Implementaion of CEFR in Malaysia: Teachers awareness and the Challenges. *The Southeast Asian Journal of English Language Studies*.Vol 24(3): 168-183.
Zoraida Mustafa (2018).JF Standards in Japanese language Classroom: A case study of USIM Japanese Language course. *Ho Chi Minh City International Symposium on Japanese Language Education. Proceedings paper*.

---

[i] プログラムの構成で 1 学年にあたり、セメスター 1 のみ日本語が履修できる。現在はプログラム構成の見直中で 2020 年より毎セメスター日本語履修できる見込みである。